

精神科看護師の履物に関する意識調査

キーワード：履物・精神科病棟・転倒

2病棟2・3階

林美由紀 西村佳代子 河村光男 佐々木かづ子 前田美恵子 兵頭紀代美

I. はじめに

精神科患者の多くは向精神薬を内服しており、向精神薬の副作用のふらつきや起立性低血圧により転倒を起こしやすい。A病院精神科病棟（以下B病棟）では院内の転倒転落アセスメントチェックリストに沿って転倒転落の危険性を予測し、患者に対し転倒予防について説明を行っている。しかし、B病棟における昨年度の全インシデントのうち、転倒転落は37.3%であり最も多いインシデントであった。治療上、向精神薬内服による転倒のリスクは避けられない。しかし、転倒は様々な要因が関連して発生することが知られており、その一つとして不適切な履物が挙げられる。田淵らは「スリッパは転倒を誘発する因子となる」¹⁾と述べており、B病棟においても昨年度の転倒転落のうち履物が関連した転倒が5件発生している。さらに、看護師が転倒予防の説明を行ったにも関わらず、スリッパやサイズの合わない靴を使用している患者もみられる。一般病棟では入院患者用テレビの無料放送チャンネルで転倒転落予防のDVDを見ることができ、視覚的にも履物について提示することができる。しかし、B病棟には治療上入院患者用テレビは設置していないため説明時に院内の転倒転落予防のDVDを活用しにくく、転倒予防の説明は看護師個々に任されている。そこで、今回、看護師の履物に関する意識を明らかにし、今後の介入方法を検討したので報告する。

II. 目的

精神科看護師の履物に関する意識と、患者が使用している履物の現状を明らかにする。

III. 方法

1. 研究期間：平成25年8月～平成26年2月
2. 対象：B病棟に勤務する看護師25名（看護師長は除く）
3. 方法：
 - 1) 対象に対し、独自で作成したアンケート用紙を用いて、選択と自由記載での回答を求めた。アンケート内容は、対象の属性（性別、年齢、看護師の経験年数および精神科の経験年数）と独自で考えた項目（転倒の要因、転倒予防の説明内容、具体的な履物の提示の有無、履物の説明の時に困ったことはないか、説明後に患者が使用している履物についてどう感じたか、履物に対する患者からの反応）とした。
 - 2) 研究メンバーが主体で、患者が使用している履物について観察を行った。観察を行った日については、調査期間中に新たに入院した患者の場合は入院1週間目、すでに入院している患者の場合は研究メンバーが設定した日とした。
 - 3) 方法1)、2)のデータを単純分析した。
4. 倫理的配慮：研究目的、自由意思による参加であることを口頭・文書を用いて対象

者に説明した。また、アンケート調査は無記名とし、調査書の回答提出をもって同意とみなし、提出後の同意撤回はできないことを説明した。

IV. 結果

アンケート回収率は 96.0%であり、うち有効回答率は 95.8%であった。

1. 対象者の属性（看護師 23 名）

- 1) 性別：男性 4 名、女性 19 名
- 2) 年齢：29 歳未満 7 名、30～39 歳 6 名、40～49 歳未満 7 名、50 歳以上 3 名
- 3) 看護師の経験年数：3 年未満 6 名、3～5 年未満 1 名、5～10 年未満 4 名、10 年以上 12 名
- 4) 精神科の経験年数：1 年未満 8 名、1～3 年未満 5 名、3～5 年未満 3 名、5 年以上 7 名

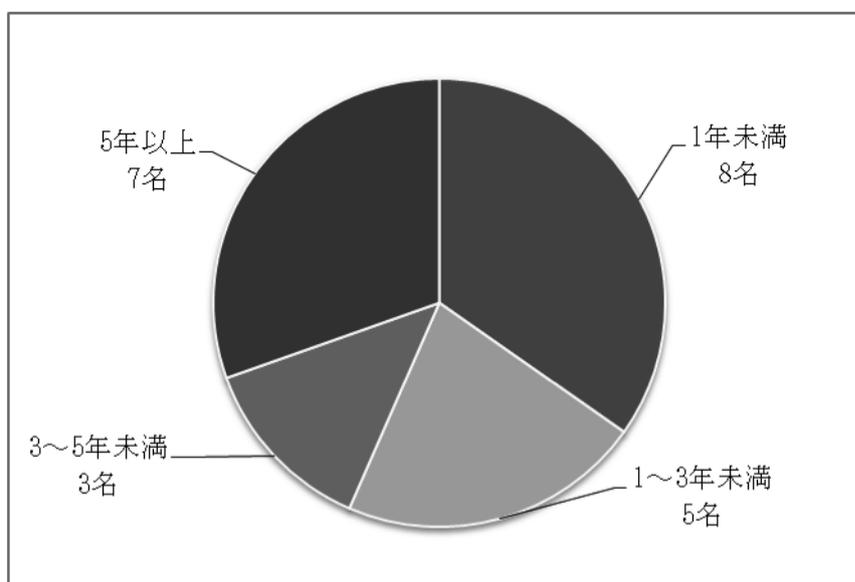


図 1. 精神科の経験年数

2. 転倒の要因

転倒を起こす要因として考えられる項目として、「年齢」、「転倒歴」、「視力の低下」、「薬剤（睡眠薬等の使用）」、「筋力低下・麻痺・拘縮」、「認知機能の低下」、「ふらつきの有無」、「補助具の使用」、「不適切な履物」、「排泄（夜間のトイレ等）」、「ルート類」、「病状（発熱、低血圧、浮腫など）」、「その他」の 13 項目を挙げ、「不適切な履物」を回答した看護師は 100.0%であった。また、13 項目のなかで要因として意識している項目の順位づけでは、34.8%の看護師が 5 番以内に「不適切な履物」を選択していた。

不適切な履物が転倒を起こす要因と考える理由としては、「すべる」、「つまづく」、「足元が不安定になる」等の意見が挙げられた。

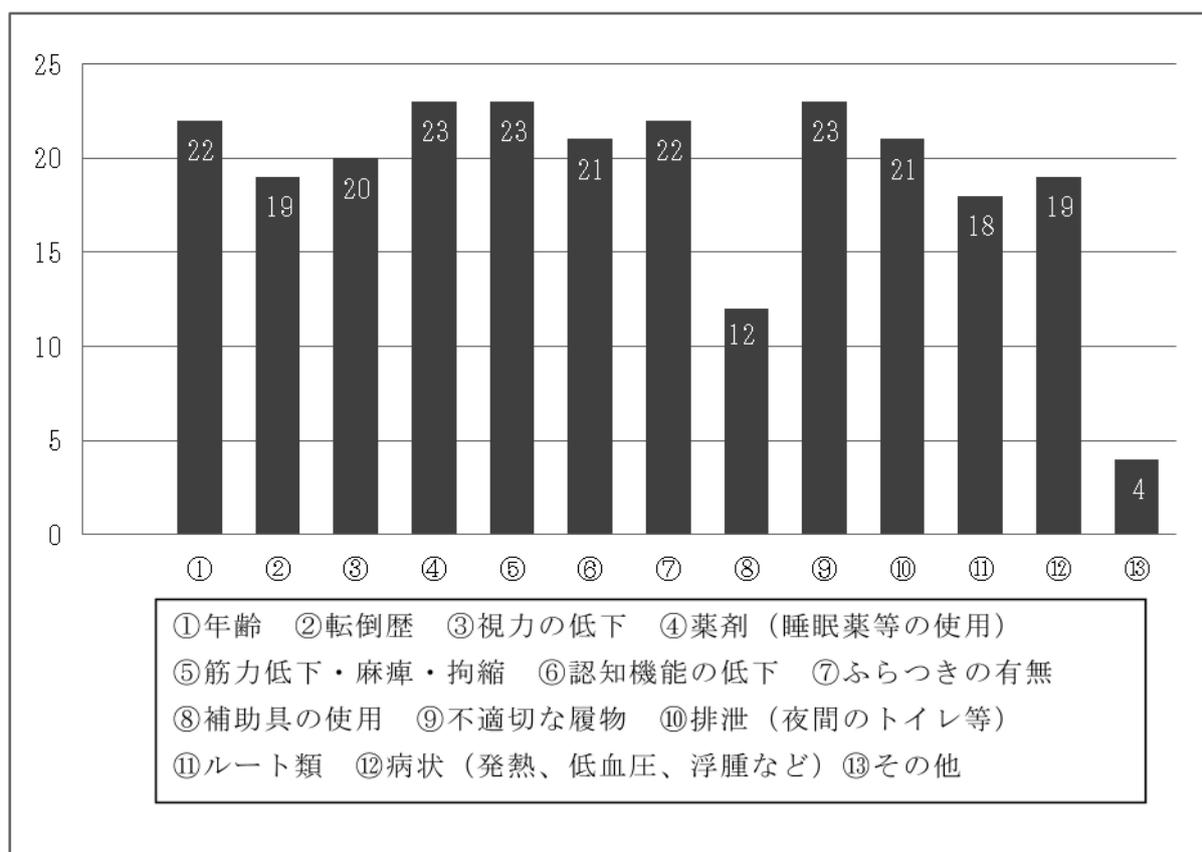


図 2. 転倒の要因

3. 転倒予防の説明内容

院内の転倒転落パンフレットを参考に転倒予防の説明で行っている内容として、「下肢の運動をすすめる」、「ベッド生活をする上での注意点を説明する」、「履きなれた靴や滑りにくい履物を使用するように説明する」、「夜間のトイレ使用の注意点を説明する」、「ふらつきやたちくらみがあるときの対応策を説明する」、「点滴を受けているときの注意点を説明する」、「薬剤（睡眠薬等）を内服しているときの注意点を説明する」、「行動に不安があるときはナースコールで看護師を呼ぶように説明する」、「その他」の9項目を挙げ、「履きなれた靴や滑りにくい履物を使用するように説明する」と回答した看護師は91.3%であり、そのうち、81.0%の看護師が口頭で具体的な履物の例を挙げて説明を行っていた。履物について説明を行う理由として、「履物により転倒のリスクが高くなる」、「入院にあたり新しい靴を購入し慣れない履物を使用する患者が多い」等が挙げられた。一方、「履きなれた靴や滑りにくい履物を使用するように説明する」と回答しなかった看護師は8.7%であり、精神科の経験年数は1年未満であった。履物について説明を行わない理由として、「転倒予防のパンフレットに項目がない」、「患者自身がリハビリシューズを準備していた」が挙げられた。

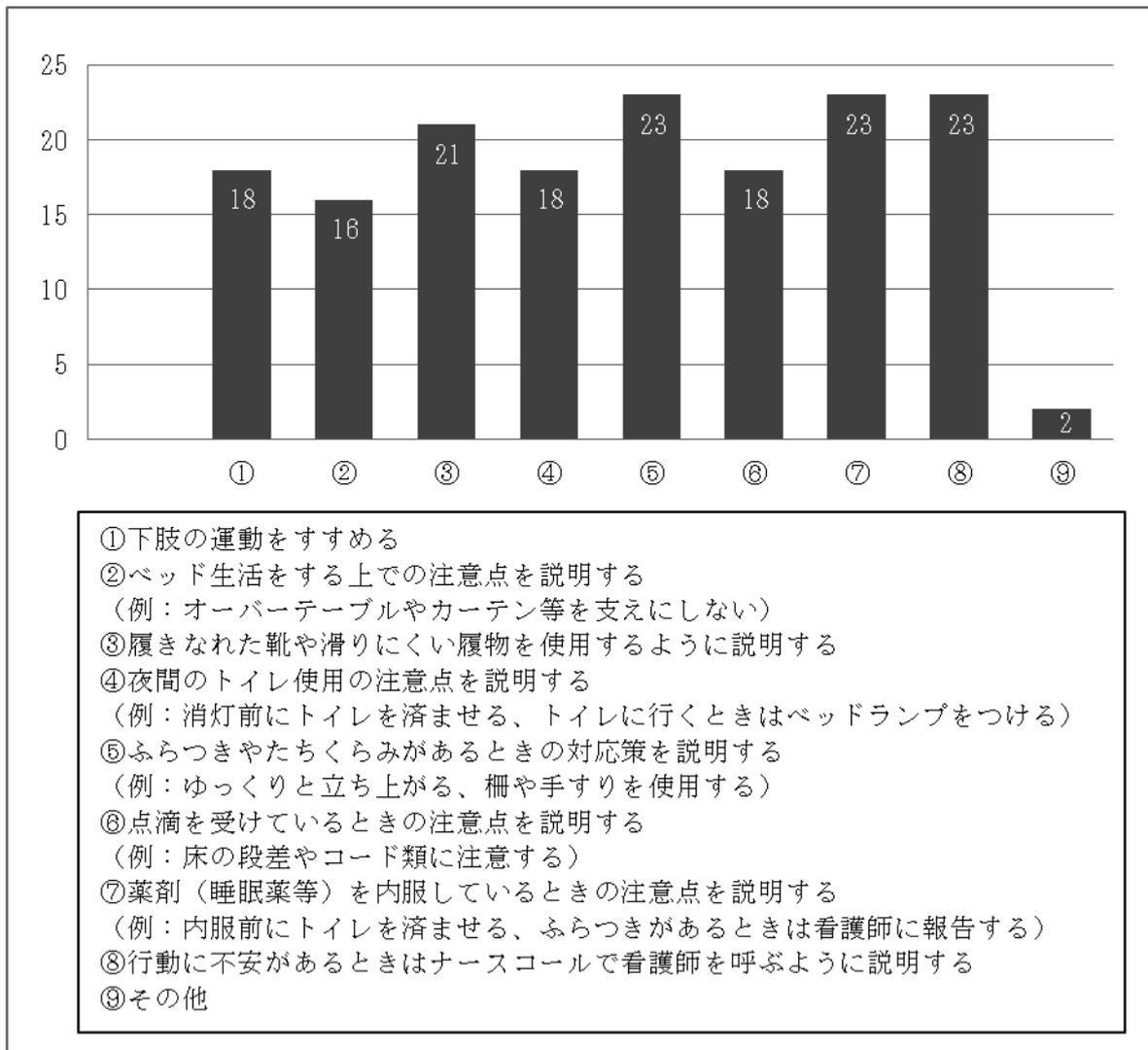


図 3. 転倒予防の説明内容

4. 履物の説明時に困った内容

履物について説明を行っている看護師のうち、57.1%の看護師が履物について説明するときに困ったことがあると答えた。説明時に困った内容として、「具体的に伝わりにくい」、「例を提示しにくい」、「説明しても聞いてもらえない」、「購入にあたって金銭的負担がかかること」、「患者に説明をしても実際に準備をするのは家族が多い」、「こだわりがある履物を用意し希望される」等が挙げられた。

5. 説明後に使用している履物に対する思い

説明後に患者が使用している履物について感じる事として、「説明した履物と違う履物を使用している・改善がみられない」、「不適切であると思っても何度も説明しにくい」、「履きなれているからと不適切と思う履物を履いている」、「脱ぎ履きしやすい履物を選んでいる」等が挙げられた。

6. 履物に対する患者からの反応

履物に対する患者からの反応について「どのような靴を買ったらいいのか」、「運動靴は履きにくい（スリッパにしたい、スリッパの方がいい）」等の質問や訴えがあったと

回答があった。

7. 患者が使用している履物の種類の内訳

患者 64 名の履物を観察し、使用している履物の種類の内訳は、運動靴（ひもなし）10 名、スリッパ 29 名、サンダル 24 名、その他 1 名であった。また、64 名中 24 名は使用している履物の他にベッドサイドに履物を置いており、運動靴（ひもなし）が 14 足と最も多かった。

履物の定義として、運動靴とはズックやビニール製で底がゴムのもの、スリッパとは足をすべりこませてはく踵部分は露出されている室内用の上履き、サンダルとは足の甲や踵部分にかけひもやバンドをつけたものとした。また、運動靴はひもありとひもなしの 2 種類に分けた。

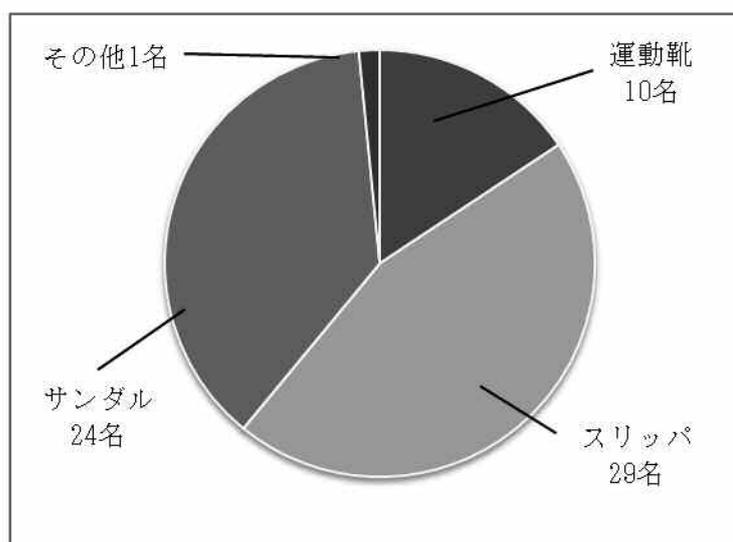


図 4. 患者が使用している履物の種類の内訳

V. 考察

アンケート結果より、すべての看護師が「不適切な履物」を転倒の要因と考え、9 割以上の看護師が履物について説明を行っていることがわかった。これらのことから、転倒予防における履物に対する看護師の意識は高いと考える。しかし、転倒を誘発する因子となるスリッパを使用している患者が最も多く、半数以上の看護師は説明に困ったと回答した。これらの背景として、B 病棟の患者は精神症状から理解力や判断力が低下し、適切な履物の選択が難しいことや履物に対する説明が十分に理解できていないことが考えられる。

精神科病棟では、精神症状から予測不可能な転倒が起こる可能性が高い。そこで、転倒を予防する上で看護師が対応可能である履物に対する介入は重要であると考え。阿曾らは「一度や二度で態度の変容を望めると期待するのではなく、忍耐強くその人に応じた内容を段階を追って進めることも必要である」²⁾と述べており、現在の説明方法や回数では行動変容に限界があると示唆された。また、今回のアンケート結果で、説明を行っていない看護師は精神科経験が 1 年未満であり、転倒のリスク要因として履物を重視していなかった。そのため、今後は現在行っている転倒転落カンファレンスのなかで履物について取り上げ、履物に対して共通の認識をもつことが必要であると考え。そして、患者の状態に応じた説明回数やタイミング等をカンファレンスで検討し、チームで介入していく必要

があると考え。さらに、口頭説明では具体例の提示のしにくさや伝わりにくい等の意見があったため、履物の絵や写真等視覚的媒体を用いた説明方法の検討も必要と考える。

VI. 結論

1. 今回、精神科看護師へ履物に関する意識調査と、患者が使用している履物の現状を調査した。意識調査では、全ての看護師が転倒を起こす要因として「不適切な履物」を回答し、57.1%の看護師が履物について説明するときに困っていた。患者の履物の現状調査では、スリッパ使用の患者が最も多かった。
2. 意識調査から精神科経験年数と説明への認識に違いがみられ、今後はチームでの介入や視覚的媒体を用いた説明方法を検討していく必要があると考える。

引用文献

- 1) 田渕直子, 河野浩子, 村上智子ら他：履物が転倒に与える影響～靴とスリッパの比較から～, 大阪労災病院医学雑誌, 28 (1～2), 27, 2005.
- 2) 阿曾洋子, 氏家幸子, 井上智子：基礎看護技術Ⅱ, 医学書院, 247, 2007.